

# 町史

とっておきの話

183

東洋大学講師

久野俊彦

## 猶戸龍藏院のまじない書

龍藏院の法印は修験者です。修験者とは、山岳を駆けめぐり厳しい修行をして、不思議な力(験力)を得た行者という意味です。その宗教が修験道です。験力を持つ法印は、様々なまじないを行なつて、人々の災いを除けました。

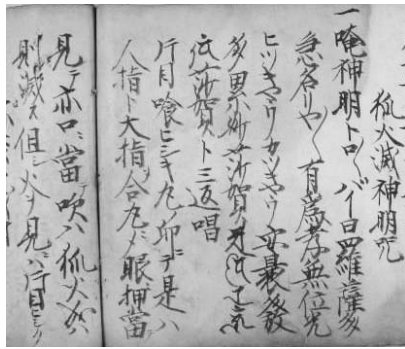


図1 『諸呪衆聚覺』の狐火を消すまじない

## 狐憑き・狐火のまじない

龍藏院の蔵書には、まじない書が含まれています。そのなか

ら狐のまじないを取りあげます。「諸呪衆聚覺」(江戸時代、年末詳)には次のように書かれています。

狐附ヲ知秘事

一、両ハたの間ニ(梵字)ウン此梵字一字、数珠之タスマニテ書也。狐附成ハ、痛ム。無左ハ、不痛也。(頭の両はじの間に、梵字ウンの一字を、数珠の手綱で書くと、狐憑きであれば痛み、そうでなければ痛まない。)

狐ヲ家辺ニ集事

一、正月朔日・二日両日、三宝ノ仏供ヲ、始ニ握タルヲ、百日陰干ニシテ、香ニシテ、加持程ニ、集也。(正月の1日・2日の両日に、三宝に載せた仏壇のお供え餅で、はじめに手にしたものを、百日間陰干しにし、粉の香にして、加持祈禱をすると狐が集まる。)

狐火滅神明呪(図1)

一、曬神明、トロトロバイ、日羅薩多、急名リヤリヤ、有為孝、無位光、ヒツキヤウ、カツキヤウ、安曇発多、累妙莎賀、(梵字)ア・ビ・ラ・ウン・ケン、莎賀、ト三返唱。片目喰ヒシキ、丸ノ卵ニテ、是ハ人指ト大指ヲ合、丸ニシテ、眼ニ押当テ見テ、亦口ニ当テ吹クハ、狐火成ハ即滅ス。但シ火ヲ見

ニハ片目ヒシク。(狐火を消すには、次の呪文を三返唱える。「オンシンミヨウ、トロトロバイ、ニチラサツタ、キュウミヨウリヤリヤ、ウイコウ、ムイコウ、ヒツキヨウ、カツキヨウ、アンノウハツタ、ルイミヨウサカ、アピラウケン、サカ」また、片目を固くつぶり、丸い卵の字のように、人差し指と親指とを合わせて丸くして、目に押し当てて狐火を見える。また、指で丸くした所を口で吹くと、狐火ならばすぐに消える。もともと、普通に火を見るときは片目をつぶるものだが。)

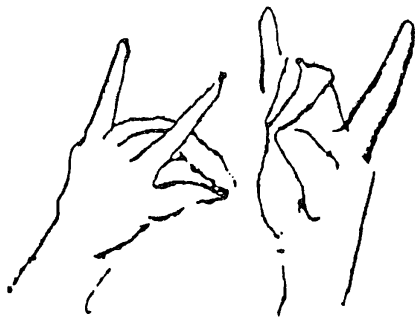


図2 中指・薬指・親指で作った場合の「狐の窓」(『南方熊楠日記』4)

## 異界をのぞく「狐の窓」

ここには、「丸を作った指の間から片目で見る」というしぐさで狐火を見ると書かれています。これは、「狐の窓」と呼ばれ、人間の日常的世界とは異なる「異界」をのぞき見るしぐさです(図2)。(常光徹『しぐさの民俗学 呪術的世界と心性』2006年)。「狐の窓」の伝承は、日本各地の民間伝承として伝えられています。「狐の窓」は、もともと民間に口伝で伝承されていたものなのか、修験者が知識として教え広めたものなのか、その前後関係はわかりません。いずれにしても、「狐の窓」の作法が、まじない書に書きとめられたことによつて、それ以降の代々の修験者は、これを参照して知識として保持しました。「狐の窓」のまじないが、民間の口頭伝承とともに、文字で書かれた書物を介した知識の伝達としても伝えられていたのです。俗信や民間知識が複数の方法で伝承されたことを考えるのに重要な資料です。